

「常世の虫」考

— 播州赤穂と秦河勝 —

今井 彰

1 「常世の虫」事件とは何か

(1) 「常世の虫」事件

西暦645年の大化の改新は、蘇我氏の専横を阻止した歴史的な大事件であったが、それまでの至近数年間には、激動期の予兆ともいえるべきいくつかの重大事象が起きている。天地の異変、百濟の内乱などにはじまって、蘇我氏の専制支配をピークにした山背大兄皇子の自殺が643年であり、前年644年には駿河の国に新興宗教「常世の虫」騒動が起っている。

日本書紀卷第二十四、皇極天皇三年の項に、その記録がある。

「秋七月に、東国の不盡河の邊の人、大生部多、蟲祭ることを村里の人に勧め、曰はく、『此は常世の神なり。此の神を祭る者は、富と寿を致す』といふ。巫覡等、遂に詐きて、神語に託せて曰はく、『常世の神を祭らば、貧しき人は富を致し、老いたる人は還りて少ゆ』といふ。是に由りて、加勸めて、民の財宝を捨てしめ、酒を陳ね、菜・六畜を路の側（はたけ）に陳ねて、呼はしめて曰はく、『新しき富（たか）入来れり』といふ。都鄙の人常世の蟲を取りて、清座（きよま）に置きて、歌ひ舞ひて、福を求めて珍財を棄捨つ。都て益す所無くして、損り費ゆること極（たぎ）で甚し。是に、葛野の秦造河勝、民の惑はさるるを悪みて、大生部多を打つ。其の巫覡等、怒りて勧め祭ることを休む。時の人、便ち歌を作りて曰はく

太秦は 神とも神と 聞え来る 常世の神を

打ち懲（な）ますも

此の蟲は、常に橘（たちばな）の樹（き）に生る。或は曼椒（まんじょう）に生る。其の長さ四寸餘、其の大きき鬚指許（ひげさし）。其の色緑にして有黒點（くろいぶ）なり。其の兎全（うさぜん）ら養蚕（やうさん）に似れり。」

ここで新興の対象として神と崇められたのは、虫であり、それはタチバナやサンショウに発生する、4寸ぐらいで太さは親指ほど云々とあるが、その分析は後にするとして、ともあれ、この騒動は、それまでの地域・土俗信仰にもとづく血縁・地縁の枠を越え、共同体というより個人の幸福を追求する新しいものであった。巫女たちもこの信仰を助け、旧来のものを否定する行動をとったので、また

たくまに拵がったわけであるが、これはいわゆる「流行神」「移風の兆し」といわれる新興宗教独特の特徴で、この「常世の神」事件こそ、日本の宗教運動の最初の記録というべきものであった。

人びとが争ってこの信仰に入り、家の財宝をすべて捨て去るほど没入するのを見ると、つい最近世間を騒がせた宗教団体が、家財の寄付を入信の条件にしたことと、個人の目的のためには家族まで捨てるという極端な方法に、類似点を見出すことができるのである。

そしてまた、この頃日本に入ってきた道教の思想は、その手段に、不老不死を目的とした心身鍛錬や医術医療をもち、それが「常世の国」の考え方を生むことになった。垂仁天皇の時代に、不老長寿の果実（タチバナといわれている）を求めて、常世国に出かけた田道間守の話や、広くは神仙が住む桃源郷として、お伽話の中にある龍宮城伝説なども、この思想が民衆の中に浸透した結果なのである。

さて、この「常世の虫」事件は、信者を増やしながら西へ進んで都に入ってくるが、これを退治したのが秦造河勝であった。記録によれば、主謀者を失った運動は急速に収まったとあるが、そうだとすれば、祭壇に祀られた虫たちはどうなってしまっただろうか。後述するようにこの虫が鱗翅類のものとするれば、幼虫から蛹になった後、その多くは羽化して成虫になったことであろう。その成虫の形態や生態がどんなだったかが大変興味あるところである。幼虫の描写は記録にあるようにかなりくわしいが、その表現にはまだ謎の部分も多く、決め手にかけるので、ひょっとして成虫が羽化するまでこの信仰が続いて、その記録が残ったならば、より一層面白い結果となったことだろうにと、いささか残念に思うのである。

(2)「常世の虫」事件の諸解釈

「常世の虫」事件は、最初に述べたように、蘇我氏の専横とそれを抑えようとする大和王家という、不安定な政治を背景にしたものであった。この奥にある各派閥の勢力争いは、当時の百済・新羅との関係がからんで、それぞれの帰化人と本国、仏教と道教の普及闘争という要素もあって、大変複雑なものになっていくのである。

いくつかの解釈を次に記してみよう。

- (7) 秦氏は養蚕技術の大元締であり、当時の絹織物全般の占有権をもっていた。部下の大生部多は、この独占体制に挑み、養蚕・絹織技術を奪おうとしたが河勝によって妨げられた。

この説をSF風にした読み物に、豊田有恒著「常世の虫」（「持統四年の謀者—小説古代王朝」所収、1975年、河出書房新社）という短篇がある。概略を記すと、百済系の蘇我氏は大和王家をしのぐ勢いをもっていたが、自前の軍隊や領民がないため、何らかの外部勢力の助けを借りて大和王家の自然崩壊をたくらむ。一方秦氏のもとに奉公にきていた駿河の大生部多は、養蚕技術を盗もうとして蚕種となる卵をもち出すが、それはすべて針で突いてあって孵化しない。多は失望し、繭を作る虫を探し出して努力するが失敗し、その間に妄想にとりつかれる。それは、緑色の幼虫を神と敬う信仰にまで至る。

この信仰がひろがっていくのを見た蘇我入鹿は、農民一揆にも似たこの動きと結託して、大和王家を脅かす大運動を起こそうとたくらみ、ひそかに手をまわすが、その時王家を救ったのは、新羅系渡来人の秦河勝であった。

- (イ) 大生部多は秦氏の統率下にある氏族の長で、いち早く地方で新興宗教の教祖として頭角をあらわしたが、その勢力拡大があまりにも早く大きいので、いわば本家でもある秦氏が、その行き過ぎを警戒して打ちこらした。

ただし、当時の道教信仰には秦氏も加わっていたといわれるが定かではなく、また大生部氏が秦氏の配下であったという確証は何もないので、単なる推測にとどまる説である。

- (ウ) 民間信仰として、着々と普及しつつある道教は、中央の仏教に対して、地方で勢力を伸ばしてきた。仏教の擁護者秦氏は、異質な道教を抑圧する方針で、地方から台頭してきた大生部多率いる道教を打ち破った。

仏教と道教の争いがいかに熾烈なものであったかについて、ここにひとつの興味ある仮説がある。それは、東京電機大学教授、斎藤正二氏の推論で、この争いの結果、なぜ万葉集に蝶の歌がないかという疑問に対する答えを導き出しているのである。いささか唐突にこの疑問が出てきたが、かつて私は「蝶の民俗学」（1978年、築地書館）において、蝶採集者の立場で、いわば生態学・民俗学的側面から、万葉集と蝶について論じた。その論点を一言でいえば、蝶を人間の靈魂とし死を不吉なものに見なした古代人は、あえて蝶の歌を詠まなかったというものであったが、この斎藤教授の説が妥当なものとなれば、私の考え方にも大きな修正を加えなければならないほどの、重要な推測なのである。

それは、「常世の虫」事件のあとも根強く続いていた道教思想が、長屋王

という擁護者を得て活気を取り戻し、またも仏教に対抗するものとして浮かび上がってきたことに注目したものである。荘子の「胡蝶の夢」は、万葉時代中国古典百科全書ともいべき「芸文類聚」に記載され、当時の道教思想のルーツにもなった考え方で、長屋王をはじめ多くの道教信者が蝶をシンボルとして扱ったにちがいないと推論する。そして西暦729年に反逆罪に問われて、藤原氏によって長屋王が処刑されると、道教は抑圧され、そのシンボルであった蝶は、政界・芸術界から消されてしまい、万葉歌の選者の頭からも意識的に飛び去らざるをえなかった、というのである。

最近、平城京の一角に長屋王の邸宅跡が発見され、木簡をはじめ、当時の生活状況を明らかにする数々の貴重な資料が出土しているが、まだ道教との具体的なかかわりあいや、蝶のことを記したものは見つかっていない。斎藤教授の推論を裏づけるような、何らかの記録が発見されたならば、この問題に新たな光が当たるかもしれない。

(3) 虫の正体は何か

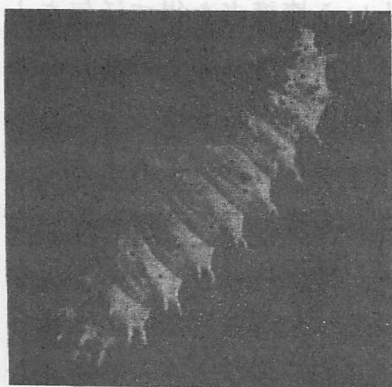
さて、「常世の虫」はいったい何の幼虫であったか。私は前述の文の中であえてアゲハチョウ科という定説を前面に出さなかった。日本書紀の描写をみると、その寸法の表現にや、誇張はあるとはいえ、ほとんどの人の解釈はアゲハチョウ科の幼虫である。しかし、ここにあえて異をとらえた人がいる。それはPL学園女子短大助教授の小西正己さんで、結論からいえば、小西さんはこれをシンジュサンの幼虫ではないかとしているのである。

日本書紀の表現「橘の樹に生る、或いは曼椒に生る」から、ミカン科の植物を食べ緑色の体色をもつものを、アゲハチョウ科の幼虫と見る従来の説について、小西さんは、その分布・食樹食草・幼虫腹部紋様の特徴から、消去法によってひとまずクロアゲハ説を妥当だと認める。クロアゲハは古代人にとって靈魂であり、黄泉の国すなわち常世をあらわすイメージをもったものであった。従って、常世の虫信仰と結びつくのはきわめて自然であろうというわけである。

しかし、次の一点で小西さんの疑いのボルテージは一気に高まる。日本書紀中の「其色緑にして有黒點なり」の読み方をくるまだらとしたことに問題があり、もしクロアゲハだとしたら、黒点でなく黒い糸または黒いシマでなくはならず、そのままストレートに読んだ「黒い点」にもっと注目すべきである、というのである。

クロアゲハ終令幼虫の

黒い条または黒いシマ



シンジュサン（ヤママユガ科）の終令幼虫

色は薄い緑色で黒点あり

さらに、「其の大きさ^{きびよびばかり}頭指許」というのも、白髪三千丈的解釈から離れてそのまま素直に読むと、太い腹部をもつ終令時の蛾の幼虫に該当するものがあるのではないかということに気がついた。ここで候補に上ったシンジュサンの食樹は、シンジュ、ニガキ、キハダなど多くの葉であるが、図鑑にはミカンやサンショウの記載はない。しかし、小西さんは、実際にカラスザンショウで幼虫が多数育っているのを見る。

あとは詳しくは省略するが、古代神と蝶蛾の記録や道教に潜む神仙思想、食樹の分布・分類など、多方面からの分析が続く。そして、きわめつきは書紀にある「新しき富入来り」の新しき富に注目し、従来の絹織物の元であるカイコと違う「新しい」富が、繭を作って人間に富をもたらす、という解釈に行きついたのである。繭を作る野蚕の中で、シンジュサンの絹糸利用実績はほとんどないと思われたが、調べてみると意外や過去いくつかの利用例があり、これをもって小西さんの推測は一層精度を増したのである。

小西さんの推論は、「古代の虫まつり」（1991年、学生社）で読んでいただきたいが、私はこの本を読んで、従来の定説にこだわらない、自由な発想による研究分析がいかに重要で興味深く、目から鱗^{うろこ}が落ちる思いであった。まだまだ完全な説得力あるものではないかもしれないが、このように新しい見方で、新しい仮説を述べるのが、大変貴重なことであると思う。そしてこの新説に対して、従来の解釈をする学者たちの反論があって、初めて学問の進歩があるのであろう。

2 秦河勝の人物像と播州赤穂での晩年

(1) 秦河勝の業績

「常世の虫」事件を鎮圧した秦河勝とはどんな人であったか、また晩年に播州赤穂にその名が残っている事跡があるのはどうしてであろうか。

まずは、秦氏の出自をみると、五世紀頃に新羅から渡来した氏族で、山背国^{ヤマシロノクニ}を本拠とし、大和王家の支配の下に養蚕・絹織技術をもつ集団であったらしい。そして、秦河勝について日本書紀では、603年に蜂岡寺^{ハチノカミ}（広隆寺または太秦寺^{ウヅマシ}のこと）を建立した人物として名前が出ており、また聖徳太子関連の資料にも、物部守屋^{モノノベノモリヤ}討伐軍を率いたことが記されていて、仏教を崇拜した聖徳太子の寵臣であったことがわかる。

しかし、聖徳太子が没した西暦622年以降、河勝の名は全く出てこずに、いきなり22年後の644年「常世の虫」事件で再び歴史に登場するのである。この間の河勝の消息はどうであったろうか。ひとつの推測として、聖徳太子の死後、蘇我氏の勢力が大きくなるにつれて、秦河勝はうとまれて中央から地方へ下りたのではなかろうか。聖徳太子の子である山背大兄皇子^{ヤマシロノオホノミコ}の自殺は、蘇我入鹿^{いるか}の策謀によるもので、太子の側近・寵臣は次々とその周囲から追われていったにちがいない。そして645年の大化の改



伝 秦河勝像（広隆寺蔵）

新である。これによって、蘇我氏は一挙に滅亡するが、その前年の予兆ともい
べき「常世の神」事件に、太子ゆかりの秦河勝を登場させ、蘇我氏打倒の象徴と
して記録の中に復活させたのではなかろうか。日本書紀の編者にとって、大化の
改新は大和王家確立のための歴史的ピークともいべき事象であり、これを正史
とし正当化・事実化するために、あらゆる手段をとったと考えても不思議ではあ
るまい。

「常世の神」事件時点での秦河勝は、すでに70才を越えていたと推定され、ま
た中央から引退していたことは、山背国葛野^{たさいのくにのくまの}という居住地が都から離れた一地方
であったことからもうかがわれる。中央から派遣された軍隊の長ではなく、一地
方の私兵を率いたとも思わせる秦河勝の、最後の焰ともいべきものが、「常世
の神」鎮圧事件であった。このあと、彼の名前は政治の世界からは全く消えてし
まうのである。

(2) 播州赤穂の秦河勝

「常世の神」事件以後の秦河勝がどうなったか、その消息はわからないが、こ
こに突然赤穂市坂越（現在はさこしと呼ぶ）にある大避神社にその名が登場する。

1862年吉田兼連が著わした「播州赤穂郡坂越浦大避大明神縁起」がそれである
が、能楽の祖である世阿弥の「花伝書」にも、同様の記載がある。

「かの河勝、欽明・敏達・用明・崇峻・推古・上宮太子に仕え奉り、此芸をば
子孫に伝え、化人跡^{ひにひとあと}を留めぬによりて、摂津国難波^{なんば}の浦より、うつぼ舟に乗りて、
風にまかせて西海^{さいかい}に出づ。播磨の国坂越^{さかご}の浦に着く。浦人舟を上げて見れば、か
たち人間に変わり。諸人に憑き築りて奇瑞^{きせう}をなす。すなわち、神と崇めて、国豊
かなり。『大きに荒るる』と書いて、大荒大明神と名付く。今の代に靈驗あらた
なり。」（「風姿花伝」第四、神儀伝）

いったい、能楽と秦河勝とはどんな関係があつて、ここに「花伝書」が出てく
るのか。それは、能楽の元である申楽^{まんなが}の創始者が秦河勝であり、時期は聖徳太子
（上宮太子）に仕えていた時とされているからなのである。すなわち、推古天皇
の時代に、聖徳太子が秦河勝に命じて、天下安全、諸人快樂のために、六十六番
の芸能を行ったのが、申楽の起源なのである。その後平安時代からは、寺院の法
会^{ほっかい}のあと、芸達者に演じさせた直会^{ちかひ}の舞になり、寺院や仏の徳をたたえ、天地長
久・千秋万歳を祝うものになっていった。

さて、「花伝書」にいう「化人跡を留めぬによりて」とはどういうことかとい

うと、秦河勝を神の化身のような人と定義したことが基礎にあるのである。欽明天皇の時代に大和泊瀬川の洪水があって、河上から流れてきた壺に入っていた赤子があり、同じ時に帝の夢に出てきた秦の始皇帝の生まれ代わりということになって、宮中で養育されたのが河勝なのである。彼は大変な秀才で15才で大臣になったという。秦始皇帝の「秦」をとって姓とした河勝は、周囲の人々から人間離れした天才として敬まわれたようである。

当時の葬送形式は、まだ土葬が主体であったから、「跡を留めぬ」ためには、姿を隠さねばならない。河勝は船に乗って西海浄土をめざしたのである。

ここで私は、時代は離れるが13世紀の鎌倉時代に始まり流行した熊野の補陀落渡海について見ておかなければならないと思う。補陀落とは、仏教でインド南方の島ポータラカを指すとされ、極楽浄土を意味したもので、その地に向って那智やその近辺の海岸から、死を覚悟して船出した渡海者が数多く出たという。中には臨終間近な僧もあり、これは実質的な水葬であったと考えられるが、私はこの行動の中に、山国であれば姥捨伝説に似た人減らし思想が含まれているような気がしてならない。

この補陀落渡海は、古代末期から中世においては、入水往生と水葬という形で存在したというのが定説で、たまたま無鉄砲な者があって、行方不明になった事例もあったことであろう。秦河勝の頃に、はっきりした補陀落渡海思想はまだなかったようであるが、彼が乗った「うつぼ舟」は屋根をかぶせてすっぽり閉じた丸木舟で、熊野からの渡海方法と同一である。しかも、浄土をあらわす「西海」をめざしている。このまま海の彼方へ消えてしまえば、河勝はまた違った意味で永遠の神として敬い奉られたであろう。

ところが運の悪い（良い？）ことに、彼の舟は播磨の国坂越浦にうち上げられてしまう。死を覚悟していた河勝は、命を助けられてまことに複雑な気持であったことと思われる。これを察するに、変なたとえであるが、終戦間際に神風特攻隊で出撃した青年隊員が、エンジン不調で不時着し、死のうにも死にきれない心境に至ったことに似てはいないだろうか。彼らの精神状態は非常に不安定になり、異常で過激な行動をとったことは、よく知られていることである。

河勝は、その憤懣を助けてくれた人びとに直接ぶつけたのではないか。それが「大きに荒るる」という表現になり、村人は恐れおののいて、神と祀ったのではなかろうか。「諸人に憑き崇りて」というのは、村人の困惑する様子をあらわして、大変正直な記述である。しかし、神となった以上は、その気狂いじみた行動

も「奇瑞をなす」とプラスの表現をしなければならなかったというのが、真相であろう。

そして、秦河勝がのちに千種川流域を開拓して、坂越で生涯を終えたというのが、諸縁起や社記による伝承であるが、その根底には、赤穂地域に住んだ秦氏の中央との結びつきを願う思いがこめられていたと思われるのである。というのは、天武天皇が新しい社会身分秩序として定めた「八色姓」には、大化の改新以前の「造」が無くなり、「運」（その後忌寸もあり）姓に統合されたが、これらの賜姓は中央のみであり、赤穂地域の秦氏は相変らずで中央の変化にとり残されてしまった。かつての中央との関係を復活しようとした赤穂の秦氏が、大化の改新以前に中央政界で活躍した河勝の霊を祀って、夢よもう一度と考えたのは当然のことであろう。

(3) 現在に残る秦河勝礼讃

大避神社は秦氏の祖先神を祀る氏神（氏族の神）であったが、やがて地域の守護神へと変っていき、今日ではその地域に住むすべての人びと（氏子）の守り神となった。祭礼は毎年10月の第2日曜日に行われ、その時に豪華な海上渡御行事があるというが、これは豊漁を願うとともに、その発生源に秦河勝の補陀落渡海伝説があるにちがいないと思う。また、祭礼には申楽や能・狂言が演じられるが、これは前述した申楽の創始者河勝をたたえる行事に他ならない。祭礼に申楽奉納があるのは全国的にも珍しく、これが秦河勝のおかげとあれば、坂越浦地域の氏子たちは、はるか昔の河勝漂着に感謝すべきなのかもしれない。

現在、河勝が流れついたらとされる生島は、その名の由来がまさに生きて着いたということにより名付けられ、付近の住民からは聖なる島として保護されている。そこに自生する樹林は、国指定の天然記念物で、国立公園特別保護区にもなっている。

今回、姫路昆虫同好会が、淡路島および家島諸島などの昆虫類の関連を把握するため、この聖域にあえて立ち入って調査したことは、大変意義深いことであるし、それを心よく許可して下さった、大避神社宮司さんの勇断にも敬意を表するものである。

すでに見つかったものとして、蝶類ではナミアゲハ、アオスジアゲハ、ヒメジャノメ、イチモンジセセリとあって種類は少ないが、季節を変えればもっと増えることであろう。

秦河勝が漂着した時に、もしこれらの蝶、特にアゲハチョウ科の幼虫（これは

定説。小西氏によればシンジュサン幼虫)でも草についていて、それを見たとしたら、河勝はかつて大生部多鎮圧の時に、すっかり退治したはずの「常世の虫」が、こんなところにまだ生きているのを知って、大いに驚いたかもしれない。というより、自分が根絶したと思った虫が、それを恨みに思つて追いかけてきたとでも考えて、一瞬混乱に陥ったことであろう。これは全くの想像であるが、彼が「大いに荒るる」状態になったのは、そのためであつたのだろうか、と考えるのは、現在神に昇格している秦河勝に対して、はなはだ失礼なことになるであろうか。